

活人活論

『いま、部落史がおもしろい』その後(1)

渡辺 俊雄

部落史学習は岐路に立つ

最近、何種類かの啓発のパンフレットや、教育現場での部落史の指導案(展開例)を読んだが、近年の部落史研究の進展から取り残されたかのような、旧態依然とした部落史が書かれていることがまだまだ多いようだ。具体的に引用するのは省略するが、江戸時代の身分制度を「土農工商」で説明し、いわゆる部落の起源を「農民の不満や抵抗をおさえるために、かわた身分をつくった」式の説明がいまだに生きているし、こうした部落史学習に批判があつた時、その批判に答えるすべがないといった現実がある。

なぜこうした説明では具合が悪いかと言えば、いかに権力が強大な力を持っていても、なんの前提もないとこ

ろに「かわた」身分を作ることではできないし、そもそも権力をそのように強大なものと考えてはならない。また「かわた」身分の多くは明らかに中世の被差別民の、少なくとも一部の系譜を引いているのであって、違いのなかつた民衆の中から「かわた」身分が生まれてきたのではない。

さらに中世の被差別民の中には死んだ牛馬の処理を仕事とする者もいて、近世になって押し付けられたわけではない。死んだ牛馬の処理という仕事は「人の嫌がる仕事」だとか、住む場所を「強制された」とか、そうした側面・事実もあるが、その側面だけで見ると近世初頭の「かわた」身分の実像を見誤ることになる。また武士・百姓・町人・かわた・ひにんといった厳格な身分制度が近世の初めからあつたわけではなく、「分裂支配」という目的で、かわた身分をつくった」ことを示す資料もない。

さらに、分裂支配の目的で「かわた」身分をつくったという説明の前提としてあった「江戸時代の百姓は農民で、みな厳しい搾取に苦しみ、貧しくて、たえず不満を抱えていた」という像に、今日では疑問が持たれるようになってきているのである。

その意味で、部落史の啓発・教育はこれまでのままでいいとは思えない。その内容・形式ともに、いま啓発・教育における部落史学習は大きな岐路に立っている。

研究の成果は届かず

にもかかわらず、部落史学習について言えば、啓発や教育の現状は実はかなり深刻なのではないかと最近感じている。深刻というのは、従来通りの部落史がまだ通用しているという意味ではない。研究の成果が啓発・教育の現場に生かされるのにはそれなりの時間もかかるだろう。深刻なのは、そうした部落史像を問い直す機運が必ずしもすべての啓発や教育現場にないこと、あるいはこれまでの部落史の啓発・教育のあり方に疑問を感じていても、急には修正がきかぬまま走り続けていることである。

お手紙などを頂戴したが、拙著を読んでの感想はおおむね「いまさら」、「ようやく」、「実は」の三つに整理できるだろうか。

「いまさら」とは、今までいわゆる部落の起源を「権力が農民の不満や抵抗をおさえるために、かわた身分をつくった」と授業してきたのに、「いまさら」それが間違いだなどと言わないでほしいという、悲鳴のようなものである。

「ようやく」とは、渡辺もようやく近世政治起源説の足枷を少しづつふりほどいたか、という意味である。なお「ようやく」の次には大抵、それでもまだ近世政治起源説の呪縛から完全に自由になっていない、と続く。

そして「実は」とは、これまで権力が「かわた」身分をつくったと聞かされてきたが、「実は」なんとなく疑問を感じていたのだが、やはりそうだったのか、といった意味で、この種の反応が意外と多かった。拙著の内容がどこまで歴史的な批判に堪えうるものかどうかかわからないが、とにかく従来からの枠組みに囚われることなく自由に発想し議論する機運を作るのに役立つとしたら、これこそ拙著の最大の願いが叶ったと思う。

部落史の啓発・教育の問題点、とくに単純化された近世政治起源説による部落史の理解を公然と批判したのは、一九九三年に畑中敏之さんが書いた『部落史』を問う(兵庫部落問題研究所)だった。同書のうち、中世と近世を断絶してしまう従来の単純化された近世政治起源説の理解に対する批判は当たっていた。しかし同書の論調全体がこれまでの解放教育にたいに批判的だったためか、部落史の理解に関する正当な指摘は、啓発や教育現場に生かされることはほとんどなかった。

私じしんも、これまでの啓発などで語られる部落史像に問題があると徐々に感じて、その一端を『部落解放研究』九四号(一九九三年一〇月)や『解放教育』三三二号(一九九五年一〇月)などで述べたが、論旨が一貫していなかったせいもあって、これまたあまり議論にはならなかった。研究の成果、研究者の声というのは、なかなか啓発や教育の現場には届かない。届くには、時間がかかるものである。

いまさら、ようやく、実は

しかし、昨年私が出した拙著『いま、部落史がおもしろい』に対する反応は、少し違った。いろいろな方から

誤りを正すに躊躇せず

ところで思い返せば、拙著は私じしんの歴史の理解が不十分なまま活字にした部分が多いために、誤りや不適切な記述もあった。例えば斎藤洋一さんからは、いわゆる「解放令」を「太政官布告第六十一号」と呼ぶ誤りを鈴木二郎さんが指摘したのは『現代社会と部落問題』ではなく、鹿島出版会から出た『現代社会と社会学』に収録されている「解放令」再考」という論文だと指摘をいただいた。

藤沢靖介さんからは、網野善彦さんの議論を紹介した部分の「時国家は広大な土地を持つていたわけではなく」というのは誤読だと指摘された。この部分は最新の『部落解放史・ふくおか』八三号(一九九六年九月)で「それまで時国家は豪農だと思われていたのですが、もちろん農業も営むが、廻船や金融・山経営まで進出したという、従来の百姓の概念ではくれない家だったのです」と訂正しておいた。

また奥田均さんからは、部落の貧困「それじたいが部落問題なのではありません」(一〇頁)、部落の環境改善「それじたいが部落問題の解決ではありません」(一八〇

頁」という記述に対して異議をいたされた。確かに格差は正だけで部落問題が解決するかのような議論に反発するあまり、一面的な記述になってしまった。とりあえず「それだけが部落問題なのではありません」、「それだけが部落問題の解決ではありません」と訂正しておきたい。

中世の賤視観念

中世の被差別民にたいする賤視観の議論についても、少し補足しておきたいことがある。拙著では主に網野善彦さんの『日本論の視座』によりながら、「中世前期までは差別が畏怖・畏敬と結びついていたものが、中世後期になると……ケガレ意識や卑賤観が強まり、……差別が賤視と直結するようになった」(二七〇―二八頁)とした。これでも間違いではないと思うが、中世前期に賤視がなかったわけではない。差別と賤視がつながっていたことは、拙著でも引用した『塵袋』などでも明らかである。重要なのは、中世前期にはその賤視が畏怖・畏敬と結び付いていたのに、中世後期にはそうした畏怖・畏敬の念が弱まり「不浄」観が強まることである。

すでに八年前、部落解放研究所が編集した『部落解放史』上巻(一九八九年)に横井清さんの「賤視される人

びと」が掲載されていて、そこで横井さんは中世の被差別民への賤視観について、次のように述べていた。

「塵袋」の原文には「卑賤」の認識はみられても「不浄」性をあからさまに示す言辭はなく、あるのは中世仏教者のいう「悪人」視である」(九六頁)

「ここでいう特殊視とか賤視とかは、たしかに今日の私たちのいう蔑視を意味する。しかし同時に軽視してならないのは、特殊視とか賤視とかの裏面にあったもう一つの強烈な面である。それは、いわば畏怖・畏敬の念でもいべきもので、人知を超えた神仏・異次元の世界に確実に通じ交流する力に異能を保持している者」集団という認識が、「まわり」の人びとにただならぬ畏怖・畏敬の念を抱かせるとともに、相手との間に一線を画させる差別の歴史、その道筋を用意していた」(九九頁)

問題は啓発だけではない

誤りや不適切な記述だけでなく、私じしんの部落史の理解が熟しておらず、論点を明確にできなかったところも多かった。例えば拙著では、他の研究者の議論を紹介する時には近世政治起源説とか中世起源説という用語を使ったが、私自身の意見を述べる時には〇〇起源説とい

う言い方をしなかった。それは、〇〇起源説と命名するほど確固たる見識を持つていなかったのも一つの理由だが、根本的には「部落の起源」という議論の仕方そのもの、近世なのか中世なのか、政治なのか社会なのかといった、二者択一を迫る議論の仕方に疑問を感じていたらである。

その結果であろうか、拙著は近世政治起源説を批判しているのか擁護しているのか、曖昧だという批判もいたされた。確かに、その通りだった。拙著を書いた時点で私は、中世起源説・近世政治起源説のどちらにも与していない、どちらも一面では真理を突いているが、それぞれ一面的であり、どちらかに拘泥する限りその主張は十分でなく、両者を総合したところに部落史の真実があるだろうと考えていた。今でもどちらにも与しないという意見は変っていないが、議論の枠組みを多少修正する必要を感じている。

そもそも近世政治起源説を、近世初頭における「政治権力の影響や、その結果もたらされる民衆間の分断」(中尾健次『江戸時代の差別観念』三一書房、一九九七年、一五五頁)を一般的に強調する議論だと言うわけにはいかない。近世政治起源説に批判的な論者の多くも、そうしたことまで否定しているわけではない。また近世政治

起源説がそうした内容だったのであれば、このように近世なのか中世なのかといった激論にはなっていないからだろう。中世起源説に弱点があるとしても、だから近世政治起源説でいい、それが正しいということにはなるまい。

政治起源説は再生するか

近世政治起源説が「説」と言うからには、部落史を理解する体系だと考えるのが妥当だ。近世政治起源説は、

- ① 政治権力が部落をつくった
- ② その時、権力が死牛馬処理や行刑役を強制・固定ないし押しつけた
- ③ 同時にケガレ意識を利用して、民衆に部落を賤視あるいは不浄視させた

という理解を骨子にしていたと整理することは、あなたがち不当ではあるまい(寺木伸明「上杉聰さんの「天皇制と部落差別」の検討」、解放新聞社編『部落史を読みなおす』解放出版社、一九九二年、七四―七五頁)。そしてこうした理解の背景には、身分はつくられるものだし、江戸時代二六〇年の間厳しい身分制度が続いた、そして農民は貧しく、部落をつくったのは民衆の分裂支配という

政治的な目的があつた、という認識があつた。

とすれば、詳しくは拙著を読んでいただくとして、まさにそうした近世史、部落史の見方がいま問い直されているのであり、新しい部落史像を作り出すには、近世政治起源説への批判を一度はくぐり抜けなければならぬのではないか、と思う。

確かに一般論としては、中世起源説が主張している積極的な内容を取り入れて近世政治起源説を再生させるという意見もあるだろう。ほかでもない私が拙著の原稿をまとめ始めた時はそう考えていたのだが、根本のところでは近世政治起源説は中世起源説とは相容れないし、中世起源説を取り入れて「再生」した論は、もはや従来通り近世政治起源説とは呼べないだろう。

中世「政治」起源の不思議

ところで同じ中世起源説と言っても、峯岸賢太郎さんが中世「社会」起源を強調する（『部落問題と国民融合』）のたいして、上杉聰さんは「政治」起源を強調する。上杉さんの部落史理解は近著『部落史がかわる』（三一書房）でよく示されている。上杉さんの年来の主張の核心は、まず「被差別部落」という用語を旧えたあるいはひ

にんだけではなくて、その他の被差別民すべてを包括する広い概念として使い、それゆえにひろく被差別民への差別の本質を「社会外」とし、そうした差別のあり方は中世にまでさかのぼるとした上で、「こうした部落差別のあり方は……国家によって上から、意識的に、政策的に、作られたもの」（二二二頁）とするところにある。

しかし、上杉さんの近著のどこを読んでも、差別が「国家によって上から、意識的に、政策的に、作られた」ところが具体的に示されていない。そもそも今日の歴史研究では、差別や身分が国家によって上から意識的、政策的につくられるという考え方に否定的である。上杉さんは近世政治起源説を批判して「そうした史料は、いまだに一件も発見されていないのです」と言うが、その言葉はそのまま上杉さんに返ってくる。

同書を読んで、上杉さんの説は近世政治起源説と根が同じではないのか、残念ながらこれでは「部落史はかわらない」と感じた。政治が差別を作るという発想にしても、高度で巧妙な支配政策とか、当時の農民の運動が持っていた深刻な弱さといった議論の仕方にしても、あるいは解放運動との距離の置き方も、よく似ている。中世起源説が部落差別の解消に有益かどうかは、私にとってはどうでもいいことで、むしろそうした歴史研究と実践

的課題を安易にあるいは性急に結び付ける姿勢を克服することこそ、この間の起源論争の最大の教訓ではないかとさえ考えている。

横井清さんの「警鐘」

私は拙著で、主に朝尾直弘編『近世の身分』七八身分と格式▽（中央公論社、一九九二年）などに依拠して、主に「身分はつくれない」という観点から近世政治起源説を批判した。しかし同時に大事なのは、近世政治起源説がこれまで説明してきたのは「かわた」という「身分」の成立のことであって、「かわた」身分が置かれている差別の姿についてではなかった、ということではないか。比喩的に言えば、差別が前提にあつて身分が成立するのであり、身分の成立から差別が始まるのではない。身分の成立が差別のあり様に影響を及ぼすことはもちろん否定しないが、近世政治起源説ではまず身分の成立ありきで、そこからすべてを説明しようとしてきた、この点にそもそも限界がある、と思う。

横井清さんは先にも触れた「賤視される人びと」のなかで、中世の被差別民を観る視点について「彼らが罪障の意識に日夜浸されつつも、生きがためにやむなく、

人の嫌がる、類の仕事に殺生を働いているかのように、あらかじめ思い込み、その悲惨で苦悩に満ちた立場なるものを想定してかかる発想の仕方が、真実、彼らの歴史的・人間的な実相に接近する道につながるのか否かが問題である」（二一四頁）と、「警鐘」を鳴らしていた。

つい最近まで、私自身はこの文章の意味をよく飲み込めなかつた。しかし、いまの私にはほとんど違和感がな。横井さんが言うように、このことに気が付いてこそ初めて「いわゆる「近世における部落の定立」ということの歴史的意義を総体的に点検しうる時に立つことができる」（二一九頁）と思うし、部落史が実に豊かに見えてくる。研究所も、なかなかいい本を出しているものだ、そのことをみんなが理解しているかどうかは別にして、と思う。